

『伊勢物語』第五十八段の一端

―農作業歌と「すだく」の視点から―

橋 本 美 香

一 はじめに

『伊勢物語』には、『古今和歌集』の「題しらず」歌をそのまま利用したり一部書きかえたりして、全く関係のないストーリーをつけた段が二十余り存在する。第五十八段も、そのような章段の一つである。この段は、地の文において「昔男」が唯一「色好み」だと形容される点で目を引くのだが、内容もかなり特殊な段である。

むかし、心づきて色好みなる男、長岡といふ所に家つくりてをりけり。そこのとかなりける宮はらに、こともなき女どもの、おなかなりければ、田刈らむとて、この男のあるを見て、「いみじのすき物のしわざや」とて、集りて入り来ければ、この男、逃げて奥にかくれにければ、女、

荒れにけりあはれいく世の宿なれやすみけむ人の訪れ
もせぬ

といひて、この宮に集り来ゐてありければ、この男、
むぐら生ひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のす
だくなりけり

とてなむいだしたりける。この女ども、「穂ひろはむ」と
いひければ、

うちわびておち穂ひろふと聞かませばわれも田づらに
ゆかましものを

（本文は『新編日本古典文学全集12』小学館 一九九四年二月による）
一首目の「荒れにけり」歌は、『古今和歌集』巻第十八・雑歌下・
九八四番に、題しらず・よみ人しらずとして入集する。本段は、
『古今和歌集』では不特定だった場所を旧都「長岡」に設定し、

「昔男」の田舎暮らしを描いてみせた。このように、『古今和歌集』にある有名な歌に新解釈やさまざまな設定を加え、読者が驚くようなストーリーに仕立て上げようという意図が、『伊勢物語』にはいくつも見られる。今回はこの第五十八段を二つの視点から考えてみたい。

二 農作業を題材とした和歌

本段において最も特徴的なのは、稲刈りをめぐってのやり取りである。稲刈りが登場する理由として、長岡が田舎であるというだけでは十分ではない。『伊勢物語』の中で一番の田舎といえ、陸奥国であろう。たとえば、第十四段は女性の歌に万葉歌を利用して、時代遅れの印象を与えたうえで、語り手に「うたさへぞひなびたりける」と言わせているが、語られる内容はあくまでも恋愛である。第十四段では田舎の女性とのやり取りを描こうという試みが大事なのであって、田舎の風景は関係ないと言ってしまうはそれまでだが、都から遙か遠く離れた地であっても語られることのなかった農村風景が、旧都「長岡」の地で重要なモチーフとして登場するのはなぜなのか。

まず、平安時代の文学作品（散文）の中で、田植えや稲刈り

が描かれた場面を拾ってみる（以下の本文は『新編日本古典文学全集』により、傍線は引用者による）。

『蜻蛉日記』には、「あまた若苗の生ひたりしを取り集めさせて、屋の軒にあてて植ゑさせし」が、いとをかしうはらみて、水まかせなどせさせしかど」（中巻・天禄元年六月）・「東の門の前なる田ども刈りて、結びわたしてかけた」（中略）焼米させなどするわざに、おり立ちてあり」（下巻・天延元年九月）・「門の早稲田もいまだ刈り集めず、たまさかなる雨間には焼米ばかりぞわずかにしたる」（下巻・天延二年八月）の三場面がある。道綱母自身が指図して早苗を植えさせたり、稲刈りをさせたりした様子がうかがえる。また、道綱母も焼米作りをしたようである。

『源氏物語』手習巻には、「秋になりゆけば、空のけしきもあはれなるを、門田の稲刈るとて」とある。若い女たちが稲刈りをするのを見て、浮舟が東国にいた頃を思い出す場面である。物思いにふける浮舟と、田夫のまねごとに興じる若い女たちを対照的に描き、浮舟の生い立ちが絡んで、田園風景が回想場面へと切り替わるスイッチとして機能している。

また、『枕草子』には、第二一〇段（賀茂へ詣る道に）に田植えの様子が、続く第二二一段（八月つごもり、太秦に詣づと

て)に稲刈りの様子が描かれている。どちらも宮中においては目にするのではない作業に、自分とは違う世界のことだという立場を貫きつつも、その様子を細かく観察し、興味の対象として見ている。

『蜻蛉日記』は道綱母が広幡中川へ転居した後のことであり、『源氏物語』で浮舟がいるのは、夕霧巻に登場した小野よりもさらに奥に入った山里である。都の中心部から少し離れると、家の前に「門田」を持ち、水田を間近に見ることのできる環境ではあったようである。『枕草子』も賀茂や太秦へ行く道中であり、宮中で生活していても、そのような折に田植えや稲刈りを目にする機会があった。旅というほどの距離ではないが、わざわざ出かけていく程度には距離感のある土地において、稲作が描かれている点に注目したい。今回取り上げた第五十八段も、郊外である長岡が舞台となっている。都から遠すぎない田舎を描くのに、稲作はちょうどいいモチーフであったのだ。

続いて、和歌において稲作にまつわる語がどれほど詠まれているのかを確認してみる。上代から『伊勢物語』が最終的に完成した頃かと思われる十一世紀中頃までの和歌で、田や稲に関わる詞(田返す・苗代・穂・田刈るなど)を詠みこんだ歌は、三五二首確認できた。そこから後の歌集に重複して採られている

る歌を除き、歌の内容に農作業を含む和歌に絞ると、一七六首が残る。これをさらに「農作業のみ」・「農作業＋季節の推移」・「農作業＋恋(相聞)」・「農作業＋述懐」・「農作業＋風流」の五つの基準で分類した。以下に例歌を挙げておく(和歌の本文及び歌番号は『新編国歌大観』により、適宜漢字をあてた。ただし、『万葉集』は『新編日本古典文学全集』による。以下同じ)。

〈農作業のみ〉

湯種蒔くあらしの小田を求めむと足結出で濡れぬこの川の瀬に
(『万葉集』巻第七・雑歌・一一一〇)

ほにもいでぬ山田をもと藤衣稲葉の露にぬれぬ日ぞなき
(『古今和歌集』巻第五・秋歌下・三〇七・題しらず・よみ人しらず)

〈農作業＋季節の推移〉

昨日こそ早苗取りしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く
(『古今和歌集』巻第四・秋歌上・一七二・題しらず・よみ人しらず)

かりてほす山田の稲の袖ひちて植ゑし早苗と見えもするかな
(『貫之集』四九三・同じ年三月うちの屏風のれうの歌廿八首
(天慶四年 引用者注))

〈農作業＋恋(相聞)〉

住吉の岸に田を墾り蒔きし稲かくて刈るまで逢はぬ君かも
(『万葉集』巻第十・秋相聞・二三四四・水田に寄する)

あらを田をあらすき返し返しても人の心を見てこそやまめ

『古今和歌集』巻第十五・恋歌五・八一七・題しらず・よみ人しらず

〈農作業十述懐〉

あさ露のおくての山田かりそめにうき世中を思ひぬるかな

『古今和歌集』巻第十六・哀傷歌・八四二・思ひに侍り

ける年の秋、山寺へまかりける道にてよめる・貫之

まかせてしたねもおひねば春の田のかへすがへすも憂きは
わが身を

『源順集』六八・双六番のうた

〈農作業十風流〉

さ雄鹿の妻呼ぶ山の岡部なる早稲田は刈らじ霜は降るとも

『万葉集』巻第十・秋雑歌・二二二〇

すきものとなりぬべきかなあらをだの花やてふやに心かけ
つつ

『源順集』八二・双六番のうた

あらげなるおくての稲を守る間に萩の盛りは過ぎやしにけ
ん

『好忠集』二二三・八月中

このような基準によって、一七六首を歌の内容で分類し、歌集の成立順に並べて一覧にしたものを、本稿の最後に【表1】として載せた（歌集の順番は、古典ライブラリー（日本文学 Web 図書館・和歌ライブラリー）の『新編国歌大観』を用いて、集成立順に並べ替えたものである）。詞書から屏風歌・題詠歌とわかるものはその数を（ ）に示したが、農作業を詠んだ歌の多くがこれにあたる。

あらかじめ絵や題が与えられて詠む屏風歌や題詠歌は、歌人の意思で題材を選択したとは言いがたいが、そのどちらでもない歌は、歌人が自由に題材を選択して詠んだ歌と言えよう。続いて、数が多いものについて確認しておく。

『万葉集』に農作業を詠んだ歌が多いことは、改めて指摘するまでもない。しかし、実際の労働としての農作業を詠んだものは意外と少ない。たとえば、『万葉集』巻第八・秋相聞・一六三四番歌「衣手に水渋付くまで植ゑし田を引板我が延へ守れる苦し」は、題詞に「或者の尼に贈る歌二首」とあるうちの一首であり、部立から見ても何か寓意があると思われる。同様の歌が他にも四首あり、農作業のみと分類した七首のうち五首は、実は単純に農作業のみを詠んでいるとは言えない。また、『万葉集』では、農作業を詠みながらの相聞歌が圧倒的に多い。そして、巻第四・五二番歌「秋の田の穂田の刈りばかか寄り合はばそこもか人の我を言なさむ」の「刈りばか」など、後の時代には見られない農作業特有の語が詠まれているという特徴がある。（『人丸集』・『家持集』など万葉歌人の家集は、成立の素性がはっきりしないことと、『万葉集』との重複が多いことから、今回は除外した。）『大斎院前の御集』には、斎院の敷地内に引いた遣水のせいで苗代に水を引くことができなくなり、稲が枯れてしまいそう

だという、農夫からの訴えに対する返歌があったり（一三六から一三八）、渡殿の前に田植えをする場面（一五四・一五五）や、牛に踏み荒らされた田^③を作り直す場面（三四六から三五二）があったりと、屏風歌でも題詠歌でもない農作業の歌がかなりの数収められている点で、興味深い歌集である。斎院のある場所が都の中心部から少し離れていることや、敷地内にも田を作っていたという詞書があることから、宮中よりは稲作というものが身近に見られたようだが、実景として詠まれたわけではない歌も含まれる。たとえば、二七五番歌「小山田をうちもかへさではかなくもたねまけものをまかせつるかな」と、二七六番歌「おりたちてこひぢに見ゆる田子しあればなにか小山田うちもかへさむ」は、いかにも農作業を詠んだように見えるが、石井文夫氏・杉谷寿郎氏の『大斎院前の御集注釈』（私家集注釈叢刊12 貴重本刊行会 二〇〇二年九月）によれば、「（山田を）打ち返す」には「碁石を返す」、「（種）蒔けもの」には「（碁の）負け物」、「こひぢ（小泥）」には「（碁の）持」を掛けている。この二首は田植えのことを詠んだようにでいて、実は碁のことを詠んだ歌である。また、農作業の歌ではないが、三二一番歌「苗代に蛙の声もすだかぬにいつをほどにてかへるかりがね」は、田に関する語を詠みながら、実際は帰ろうとする人を引き

止める歌である。『大斎院前の御集』には、農作業を詠んだ歌や、内容と関係なくてもなぜか稲作に関わる語を詠みこんだ歌が多い。しかし、個人家集ではないため、他の歌集と分けて考える必要がある。

そのような事情から、個人家集に絞って末尾の【表1】から三首以上農作業の歌を含むものを挙げてみる。家集の規模にもよるが、三首以上あれば、意図的に農作業を歌に詠んだと考えてよいだろう。すると、

躬恒3 貫之9 源順9 兼盛5 能宣3 惠慶法師4

賀茂女3 好忠16 重之3 道洛3 和泉式部3

となる（屏風歌・題詠歌でない歌を含むものを太字にした）。

躬恒と貫之は『古今和歌集』の撰者であり、順と能宣は『後撰和歌集』の撰者である。そして、順・兼盛・惠慶・重之といえ、いわゆる「河原院グループ」の歌人である。河原院に集う歌人達について最初に取り上げられたのは、犬養廉氏であらう。犬養氏は「河原院の歌人達―安法法師を軸として―」（『國語と國文學』平安文学の諸問題 東京大学国語国文学会 一九六七年一〇月）において、『安法法師集』をもとに交流のあった歌人達を、「惠慶・順・元輔・兼盛・兼澄・重之」以下十人はど挙げられ、「これを仮りに河原院グループと呼んでよいが、

もとより後世の和歌六人党・歌林苑の如き自覺的な結社・グループではない」とされたとえで、「グループと呼ぶには格別の目的意識も持たず、いわば散漫な雅交を重ねたもの」であるが、「彼等が何等かの意味で古今・後撰の素顔を伝え、次代の和歌史に寄与した点を重く見たい」と述べられた。

ところで、個人としては突出して農作業の歌を詠んだ好忠は、犬養氏が挙げられた「河原院グループ」には入っていない。しかし、好忠百首に応じる形で、順・重之などが百首歌を詠んでおり、互いに交流があったとうかがえる。そのため、本稿では犬養氏が挙げられた恵慶以下の歌人たちに好忠を加えて、「河原院グループ」と考えたい。中世の百首歌と区別して、初期百首と呼ばれる好忠や順の百首歌の影響下に、賀茂保憲女や和泉式部もいる⁽⁵⁾。彼らには相互のつながりがあつたと見てよいだろう。また、『安法法師集』一三番歌詞書に、源融の死後、河原院に躬恒と貫之が訪ねてきて塩竈の歌を詠んだとあり、この二人も河原院と関わりを持っていたことが知られる。その彼らが共通して農作業の歌を詠んでいたことが、今回浮かび上がった。その点について詳しく見ていきたい。

A 足曳の山の桜の色みてぞをちかた人は種もまきける

〔元慶六年^{引用者注} 同] 年四月のないしの屏風のうた十二首
〔貫之集〕五二五

B 時すぎば早苗もいたくおいぬべし雨にも田子はさはらざりけり
〔貫之集〕一四九・延喜二年五月中宮の御

屏風の和歌廿六首・雨ふるに田ううる所

A の種を蒔くために山の桜の色を見たり、B の早苗が成長しすぎるため雨でも苗を植えたりする歌は、農夫の立場に近い視点で詠まれている。農作業には時期が大事だというこれらの歌に共通するものが、河原院グループの歌にもある。

C うぐひすの鳴く音を聞けば春霞たてれをれなく急ぐ田主か

〔源順集〕八三・双六番のうた

D わさなへも植ゑ時過ぐるほどなれやしでのたをさの声はやめたり
〔恵慶法師集〕二一九

E みたやもり今日は五月になりにけりいそげや早苗おいもこそすれ
〔好忠集〕一二五

F 春まきし山田の苗はおひにけりもろ手に人は引きも植ゑてむ⁽⁶⁾
〔重之集〕二四八・夏廿

C・D は、通常なら初音が心待ちにされる鶯や郭公の声を聞いて、田植えを急ぐ歌であるし、E・F は早苗が「おゆ」前に田植えを急ぐという表現が、B に通じる歌である⁽⁶⁾。

G 郭公なくなる声を早苗とる手問うちおきて哀とぞ聞く

〔貫之集〕二四五・延長六年中宮の御屏風の

うた四首、右近權中将うけ給はりて

Gは画中の人物（おそらく農夫）と一体化して詠まれたものであるが、田植えの手を止めてまで郭公の声を聞くというのは、BからFの一刻も早くと田植えを急ぐ歌とは少し違った立場にある。先の分類で〈農作業＋風流〉として挙げた、鹿がいるうちは霜がおりても田を刈らないという万葉歌や、稲の見張りをしているうちに萩の盛りが過ぎてしまふのを心配する好忠歌と通じるものがある。屏風歌ではなく、農作業に風流の要素が足された歌を詠んだのは、順と好忠の二人であるが、彼らは貫之の屏風歌からその方法を摂取したのではないだろうか。

ここまで、貫之の屏風歌と河原院グループの歌との共通性を見てきたが、両者の繋がりについて今一度確認しておきたい。『後拾遺和歌集』巻第十八・雑四・一〇八四から一〇八六番歌に、「貫之が集を借りて返すとてよみ侍ける」として、惠慶法師・紀時文・清原元輔のやり取りが見える。同様の詞書が『安法法師集』・『元輔集』・『惠慶法師集』にもあり、河原院グループの間で貫之の家集を貸し借りした際、歌のやり取りもなされたことがわかる。このことから、河原院グループが貫之の屏風歌に学び、農作業を歌に詠むようになったと考えられるのではないか。順は「あめつちのうた」・「碁盤歌」・「双六番の歌」と、

それまで見られなかった特殊な枠組みの歌を詠んでいる。また、好忠にも「毎月集」と呼ばれる、一日一首で一年三六〇日を構成するという、新しい方法を取った歌群がある。^⑦順と好忠は、ある種の制約を自ら設定して歌を詠んだ点でも共通する。その制約とは、貫之の屏風歌に触発されて、月次屏風のように連作として歌を詠もうとしたことによるのかもしれない。^⑧

そして、従来明確に指摘されてこなかったようだが、今回躬恒と順の歌にも共通する部分が見つかった。

H 木の芽はる時になるまで苗代をあをだにもまだ作らざりけり
（「躬恒集」二四六・あを）

I あらさじとうち返すらし小山田の苗代水にぬれてつくるあ

（「源順集」四・あめつちのうた・春）

Hは「あを」という題で詠まれた歌であるが、和歌にはあまり見られない「畦」という語を詠み込んでいる。Iは『源順集』の「あめつちのうた」の冒頭歌であるが、「苗代」「畦」「作る」という表現は、躬恒歌に発想を得たものではないか。「あ」という文字を歌の上下に詠み込むために選ばれたと思われる。「畦」という素材は、すでに躬恒の歌に見えていたのである。

松本真奈美氏は「曾禰好忠「毎月集」について―屏風歌受容を中心に―」（『國語と國文學』平成三年九月号 東京大学国語

国文学会 一九九一年九月）において、好忠の「毎月集」に、

「屏風歌素材を撰取る意図があった」と指摘された。さらに「農耕生活を素材とした歌」が先行の勅撰集に見られないたため、「新奇な素材の歌、あるいは好忠の実体験の産物」などと評されてきたことに対して、「同時代までの屏風歌を視野に入れれば、こうした素材は必ずしも「新奇」であるとはいえず、またその獲得が必ずしも実体験を必要としない」と述べられた。また、川村晃生氏は「田園のうた」（『藝文研究』第六十五号 慶應義塾大学藝文学会 一九九四年三月）において、好忠詠の田に関する用語の豊富さに触れ、「一見万葉的とも思える農民的視点に立つての田の歌の方法は、平安時代に入っても屏風歌の詠法の中に生かされていた」ことから、「従来の好忠『万葉』という単一な図式は、修正の要があるかもしれない」と述べられた。

『貫之集』の屏風歌の方法を取り入れた順や好忠が、新たな枠組みを自ら設定し、一連の農作業の歌を詠んだことがきつかけとなり、その周辺にいた河原院グループの間で農作業を和歌に詠むことが流行したと仮定するのは、少し想像が過ぎるだろうか。今回は農作業を詠んだ歌をもとに大まかな傾向を見ただけでなく、詞の使い方などを詳細に検討すれば、河原院グルー

プの和歌活動についてももう少し明確な繋がりが見えてくるだろう。その上で和歌史における影響も考え直す必要があるが、今は河原院グループが共通して農作業を歌に詠んでいた点、その歌に貫之の屏風歌の影響が見られる点を確認するに留めておきたい。

三 「すだく」の用法

第五十八段について、もう一つ取り上げたい問題がある。二首目の歌、「むぐら生ひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり」に出てくる「すだく」という語である。

「すだく」の用例を調べてみると、早いものでは『万葉集』に五例ある。「夏麻引く海上渴の沖つ渚に鳥はすだけ（簀竹）ど君は音もせず」（巻第七・雑歌・一一七六）は、「音もせず」を手紙が来ないこととするか、訪れがないこととするかで若干解釈が分かれるが、いずれにせよ「鳥は音がするのに」に対して、「（あなたは）音もしない」と言っている。「すだく」という語には音の要素が入っていることがわかる例である。「葦鳴のすだく（多集）池水溢るともまけ溝の方に我越えめやも」（巻第十一・譬喻・二八三三）の第二句は、原文表記では

「スタクイケミツ」

「多集池水」となっており、多くの辞書類や注釈書などが、この「多集」という表記をもとに、「すだく」を「多く集まる」と解釈している。先ほどの一七七六番歌と比べて、この歌には音の要素が入っているかどうか、はつきりしない。「葦鴨のすだく（須太久）旧江に：野もさはに鳥すだけ（須太家）りと：」（卷第十七四〇一一）・「大君は神にしませば水鳥のすだく（須太久）水沼を都と成しつ」（卷第十九・四二六一）の三例も、音の要素の有無はどちらとも取れそうである。

『万葉集』の注釈のうち、「すだく」の考察が詳しい二冊を挙げておく。高木市之助氏他校注の『日本古典文学大系』（岩波書店 一九五九年九月）は、「集ること、音を立てること、動きまわること、の三つの要件」があり、「螢の例は、むしろ拡張した使い方」とする。澤瀉久孝氏の『萬葉集注釋 卷第七』（中央公論社 一九六〇年九月）では、「やはり萬葉の「多集」が示してゐるやうに集まる意であり、（中略）「すだく」は集る意でよいのである」とされている。

次に、いくつかの古語辞典で意味を確認してみたところ、「集まる」「集まって騒ぐ」「虫や鳥などが鳴く」のうち、どれを本義とするかによって多少の差が見られた。たとえば、中田祝夫氏他編『古語大辞典』（小学館 一九八三年二月）などは、「虫

や鳥などが鳴く意は後世の誤用」であるとしている。一方、中村幸彦氏他編『角川古語大辞典』（角川書店 一九八八年九月）では、「鳴き声を立てるような対象に限定して、その集まることを意味した語」であり、「中古には、そのような対象の集る意が、しぜん、集り鳴く、群れ騒ぐの意へ展開した」とあり、鳴く意を誤用とする説を訂正している。

ここまで「すだく」について説明されたものをいくつか見てきたが、結局先に触れた音の要素の有無が混乱のもととなっているようである。本稿では、「すだく」主体について改めて見て直してみた結果、鳴く意は誤用から生じたのではないと考える。『万葉集』ですべて鳥に対して用いられていたことから、やはり鳥が多く集まる（と、時には騒ぐこともある）様子が原義であろう。そして、時代が下るにしたがって、「すだく」ものが他にも広がっていったと見るべきである。

『新編国歌大観』で検索すると、「すだく」は三七〇例ほど確認できる。ここから後世の歌集や歌字書に重複している歌を除くと、二四五例が残る。内訳を以下に示す。

鳥 58 虫 127（うち蛭 78） 蛙 32 人 13 鹿 4 駒 2

その他 9（田子・さい・ぬし・鬼・声・いを・いろ・し）そして、平安末期頃までの用例を分類し一覧にしたものを、本

稿末尾に【表2】として載せた。『万葉集』では鳥についてのみだった「すだく」が、『女四宮歌合』において突然「さを鹿」に対して用いられた。その後『兼盛集』・『平中物語』・『惠慶法師集』・『大和物語』と、「人」を詠んだものが相次いで登場した。それと前後して『能宣集』が「蛙」を、『賀茂保憲女集』が「蛭」を、『好忠集』が「雀」と「虫」を新たに詠んで以降、さまざま「鳥」や「虫」までその用法が広がっていった。ここにも河原院グループの影響を見ることができ、この点について詳しく見ていきたい。

「すだく」が、初めて鳥以外のものに使われたのが、『女四宮歌合』である。天祿三年（九七二）八月廿日に行われた歌合において、「萩」題のもと五番歌に「さをしかのすだく麓の下萩は露けきことのかたくもあるかな」（兵部君）と、「さを鹿」が詠まれた。この五番歌は、序文に「あるはよしある山ざとのかさねにさをしかのたちより、あるはかぎりなきすはまのいそづらにあしたづのおりをるかたをつくりて」とあるので、実景ではなく、この歌合のために作られた州浜を見て詠んだ歌であるらしい。⁹⁾この歌に対して順は、「すだくふもとのなどいへるわたりはすこしいひなれたり」という判詞をつけている。順といえは、『万葉集』の訓読作業を行った「梨壺の五人」の一人で

ある。鹿が集まっている情景を「すだく」と言った例はこれま
でになかったが、順が判者として参加していることから、ある
いはそのあたりから「すだく」という語の存在が知られたのか
もしれない。

次は『兼盛集』である。「京の人の家にいちめきたり、さけうる」
として、一三一番歌「まねかねどあまたの人のすだくかなとみ
といふものぞたのしかりける」で、「人」に対して用いられた。「楽
しかりける」とあるように、たくさんの人が集まってきて賑や
かな様子を詠んでいる。後に契沖は、『勢語臆断』でこの兼盛
歌を挙げ、「是は、すだくとは鳥・むしなどの多く鳴を、みや
うにこゝろへたる人のためにもしは引べし」としている（『勢語
臆断』の本文は、築島裕氏他編『契沖全集』第九卷（岩波書店 一九七四
年四月）による）。「すだく」が鳥や虫などが鳴く意として捉えら
れていたことに對し、契沖は「人」の用例もあると注意を促し
ている。

同じく「人」を詠んだものが、『平中物語』第十九段にある。
男が家の前栽に植えた、たくさん菊を目当てに集まってきた
女たちが、「ゆきがてにむべしも人はすだきけり花は花なる宿
にぞありける」という歌を詠んで菊に結びつけた。男は菊が取
られたら困ると思い、「わが宿の花は植ゑしにこころあれば守

る人なみ人となすにて」という歌を書いて、立て札を立てていたが、油断しているうちに菊の花が取られてしまった、という話である。同様の話が、『大和物語』御巫本鈴鹿本付載・附五にも見える。「男」が「右京の大夫宗子」となっている点、一首目の歌が「きてみれば昔の人はすだきけり花のゆゑある宿にぞ有りける」となっている点、二首目の下の句が「まもる人のみすだくばかりぞ」となっている点など、多少の違いはあるが、内容はほぼ同じである。無遠慮な女たちが勝手に庭に入り込むという展開が、『伊勢物語』第五十八段によく似ている。『伊勢物語』では「鬼のすだく」となっているが、この「鬼」は女たちを指していることが明らかであるため、「人」に準ずると考える。和歌にも物語にも、女を「鬼」と言う例はほとんどないが、本段と無関係ではないかもしれない例を一つ挙げておく。

『拾遺和歌集』巻第九・雑下・五五九番歌に、

陸奥国名取の郡黒塚といふ所に、重之が妹あまたありと
聞きて、いひつかはしける 兼盛

陸奥の安達の原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことかとある（『大和物語』第五十八段にも同じ歌がある）。ここに登場する重之と兼盛も、河原院グループである。

歌物語に「すだく」人が登場したのと同じ頃、『惠慶法師集』

八〇番歌に「河原院にてあれたる心」として、「すだきけむ昔の人」もなき宿にただ影するは秋の夜の月」と、「昔の人」が「すだく」と詠まれた。これまでの歌では人が集まってその場で騒いでいたのとうって変わって、賑やかだった昔と荒涼とした現在という対比となっている。これより後、「すだく」人を詠んだものはしばらく現れないが、この惠慶歌が『後拾遺和歌集』に採られて以降有名になり、『奥義抄』をはじめとする歌学書などに多数引用されることとなった。そのためか、『後拾遺和歌集』以降に「すだく」人を詠んだ歌は、ほとんどがこの歌の影響下にある。平安末期になってようやく『忠盛集』一七〇番歌「すだきけん昔の人は影たえて宿もるものは有明の月」（遍照寺にて）が出てくるが、これは明らかに惠慶歌の影響を受けている。その後、『三井寺新羅社歌合』の二三番歌「すだきけん人をや忍ぶほととぎすあれ行く里に猶きなくなり」と、三三二番歌「あれはてて人もすだかぬ古郷に誰とかたらふ郭公ぞは」の二首があり、『残集』二二番歌「この里は人すだきけん昔もやさびたることはかはらざりけん」、『宝物集』三三四番歌「すだきけん昔の人やいひおきしあれなば宿に木の葉ふけとは」（藤原盛方朝臣）、『拾遺愚草員外』三〇三番歌「すだきけむ人こそしらねふる里の昔は今に咲けるなでしこ」があるが、藤原定家

の時代まで下っても、「人」が「すだく」と詠んだものは、これだけしか確認できない。⁽¹⁰⁾その上、昔と違つて今は人もすだかない、という共通した詠みぶりとなっている。

つまり、九五〇年前後にまとまつて詠まれた「すだく」人は、恵慶歌が有名になった後は、そのバリエーションを増やすことなく、「昔と今の対比」という文脈でしか登場しないのである。

これまで見てきたように、歌物語を除けば、『兼盛集』と『恵慶法師集』が「すだく」を人に対して用いたが、その後長らく「すだく」人が詠まれることはなかった。現在残っている例だけで断じるのはやや早急ではあるが、平安時代に「人」が「すだく」と詠んだのは、河原院グループなのである。

時を同じくして、『賀茂保憲女集』五六番歌「をぐらやまひ見ゆるかたに宿かれば蛩のすだく川辺なりけり」に、初めて音を立てない「蛩」が詠まれたが、なぜ彼女が蛩に対して「すだく」を使ったのかは疑問である。まだ確証を得ていないため詳しくは触れないが、河原院グループの繋がりを調べていく中で、前章の農作業の歌でも名前が挙がっていたことなど、『賀茂保憲女集』と河原院グループの共通点がいくつか見つかっている。前にも触れたように、何かしら交流があるところにいたとすれば、『万葉集』の訓読作業に関わった順が出入りする河原院グ

ループから、「多集」という表記を知り、蛩が多くいる様子に用いた可能性も考えられるのではないか。

ところで、『賀茂保憲女集』と同時代で蛩が多くいる様子を詠んだ歌としては、『帯刀陣歌合』の一六番歌「難波渦いさりするかと見えつるはあしまとびかふ蛩なりけり」や、『花山院歌合』の九番歌「あまつ星つねよりことに見えつるは空にとびかふ蛩なりけり」があるが、どちらも「飛び交ふ」という表現であり、「すだく」ではない。『道濟集』にも一六二番歌に、「とびまがふ蛩の影ぞうつしける思ひみだるる人の心を」(川原のほとりの蛩)とあるが、『賀茂保憲女集』と同じく川辺の蛩を詠みながら、こちらも「飛びまがふ」である。『大斎院前の御集』にも、「水に蛩のいとおほうおりゐたるといふを聞きて」と詞書にある唱和の中に、一三四番歌「とびかよふ草の蛩はいとどしくこの川辺にや光増すらむ」があるが、こちらも「すだく」とは言っていない。『大斎院前の御集』には、前章で触れた三二一番歌「蛙の声もすだかぬに」があり、「すだく」という語を知らなかったわけではない。これらのことから、『賀茂保憲女集』の例が極めて特殊であったと言えるよう。同集の成立から五〇年ほど後、天喜五年五月に開催された『六条斎院歌合』に、「草蛩似露」題で一八番歌「草しげみおける露かと見えつ

るはすだく螢の光なりけり」が詠まれて以降、歌合や百首歌を中心に、ようやく「すだく螢」という表現が定着することとなる。

また、個人として「すだく」を最も多く使用したのは好忠である。『好忠集』には四例見られるが、すべて音を出すものに対して用いている。三四番歌「我がやどにいたゐの水やぬるむらん底のかはづこゑすだくなる」、七三番歌「ねやの上にはすずめのこゑすだくなる出たちがたに子やなりぬらん」の二首は、「声すだく」とあるように、鳴き声を含む。また、二八番歌「虫の音ぞ草むらごにすだくなる我もこのよはなかぬばかりぞ」では、私は泣かないのに対して虫は鳴いているとあり、二八六番歌「長き夜にすだきし虫をいとひしに今は風の音ぞはげしき」では、鳴いていた虫の声と風の音の激しさを対比している。島津忠夫氏は「歌語ひとつ―「すだく」考―」（『語文』第四十八号 大阪大学 一九八七年二月）で、「曾根好忠のこ」とだから、おそらくは万葉語の意識で用いていると考えられるが、好忠の誤解と見るよりは、「すだく」という語のもつ原義に近かったのではないかと思う」と述べられた。さらに、「平安末期になって、「すだく」は、『万葉集』が流布して、その「多集」の字面に注目され、「多く集る」と解することが有力な説

となり、その説にもとづいて新しい和歌がつぎつぎとよまれてゆくこととなった」とまとめられた。島津氏はこの論の中では触れておられなかったが、さまざまな「すだく」虫や鳥が詠まれるようになる平安末期よりずっと以前に、賀茂保憲女が「多集」の字面に注目したかのような歌を詠んでいることを忘れてはならない。さらに、鳥以外のものが「すだく」と詠みはじめたのは、河原院グループであったことも付け加えておく。

ところで、この「すだく」という語は、平安末期以降ずいぶんと解釈が分かれる。『綺語抄』では、「潜くぐる」・「すむ」・「の、しる」の三説を挙げている。『奥義抄』では、「啼く」説を採りつつ、「集まる」意があるという問いに対して「いである」説を挙げている。（人が）出入りするという解釈を認めていたことになる。『和歌童蒙抄』では、『万葉集』の表記によって「おほくあつまる」と説明する（『綺語抄』・『和歌童蒙抄』の本文は、久曾神昇氏編『日本歌学大系 別巻二』（風間書房 一九五九年六月）により、『奥義抄』の本文は、佐佐木信綱氏編『日本歌学大系 第一巻』（風間書房 一九五七年三月）によった）。

このように「すだく」の解釈が分かれていったのは、もとの「集まる」意から離れた歌の存在に端を発するものと思われる。『若狭守通宗朝臣女子達歌合（応徳三年三月於七条）』において、

四 まとめ

「七番 鴛」題で詠まれた一四番歌「山川に心ほそくずすだくなるひとつみなるを」にや有るらんがそれである。「すだく」を「鳴く」と解釈して詠んだ歌であろうが、鳥がたくさん集まっている様子からはほど遠い、「心細く」「一つ」という語とともに詠まれている。この使い方に不審を抱いたのか、通俊の判詞には「すだくといふことを、心ほそしとはいかがいふべからん、もしあまたあらん声をいふにやあらん」とあり、「山川の水さえ渡る冬の夜につがはぬをしはいかがすだかむ」という判歌がつけられている。「すだく」蛙や虫が浸透した後には、さらにバリエーションを増やそうとした結果、本来の声を出すものがたくさん鳴いていて賑やかなイメージから離れた歌が生まれたのであろう。

これまでに見てきたように、「すだく」は、なかなか厄介な展開を見せる語である。そのような中にあつて、「人」に対して「すだく」を用いたのも、「すだく」という語の可能性を広げたのも、河原院グループであったことを確認した。歌壇と呼ぶほど確立された集団ではなかったにしろ、彼らが和歌史に与えた影響はやはり無視できない。

ここまで、第五十八段の一端として、農作業を詠んだ歌と「すだく」の用法という、二つの視点から検証を試みてきた。この二点は、一見何の関係もないように見えるが、その両方に河原院グループが関わっていたことが確認できた。彼らは貫之の屏風歌に学びつつも、屏風歌のようにあらかじめ用意された素材によらず、農作業歌を詠んでいた。そして、「すだく」の用法を広げ、人に対して用いたのも河原院グループであった。

『伊勢物語』が幾たびもの増補を繰り返しながら現在の形になったことは、従来から指摘されてきた。山本登朗氏は『伊勢物語 流転と変転―鉄心斎文庫本が語るもの』（ブックレット〈書物をひらく〉15 平凡社 二〇一八年八月）の中で、第三十九段で「至は、順が祖父なり」と「敬称抜きでその名が記されている」ことから、「源順本人、ないしはその親しい友人が伊勢物語の増補改作者の一人であった可能性はきわめて大きい」と述べておられる。この論を完全に踏襲する形ではあるが、順ないしはその親しい友人とは、つまり河原院グループではないか。今回取り上げた第五十八段は、『伊勢物語』が現在の形に近づきつつある中で、河原院グループ内で流行していた農作

業の歌と、「すだく」という語を取り入れて作られたとは考えられないだろうか。この二つの視点によって、河原院グループが『伊勢物語』の成長の一端を担った可能性を、新たに見出したわけである。

〈注〉

(1) 第六十一段に「これは、色好むといふすき者」と筑紫の女から声をかけられる場面はある。

(2) 山本登朗氏『伊勢物語 流転と変転―鉄心斎文庫本が語るもの』(ブックレット〈書物をひらく〉15 平凡社 二〇一八年八月) 第四章参照。

(3) 一四六番歌詞書に「十九日のつとめて、たをみればうしりいでみなひとすぢもなくなりけり」とあるが、「うしりいで」では文意不明。石井文夫氏・杉谷寿郎氏『大斎院前の御集注釈』(私家集注釈叢刊12 貴重本刊行会 二〇〇二年九月) が「牛入りて」の誤りとする説にしたがっておく。なお、ここは詞書に乱れが見られる箇所であるが、前書により、一四六番歌の詞書から続とした。

(4) 前掲『大斎院前の御集注釈』の【補説】に、稲の全滅は『日本紀略』や『小右記』などの記述から炎早よるものだと

いう指摘がある。そうなると一四六番歌の「牛入りて」は早魃の比喩ということになるのだろうが、その点についての説明はない。また、天野紀代子氏他『大斎院前の御集全釈』(私家集全釈叢書37 風間書房 二〇〇九年五月)の【補説】では、「斎院司の管轄の田が災難にあつて、おそらくそれが牛の狼藉によって全滅したことに伴う、女房たちの大騒ぎ」としており、早魃のことには触れていない。

(5) 久保木寿子氏「和泉式部の詠歌環境―その始発期―」(『国文学研究』第七十一巻 早稲田大学国文学会 一九八〇年六月) にすでに指摘されている。

(6) 松本真奈美氏「曾禰好忠「毎月集」について―屏風歌受容を中心に―」(『國語と國文學』平成三年九月号 東京大学国語国文学会 一九九一年九月) にも同様の指摘がある。

(7) 山本登朗氏が「妹があらを田」考―源順「碁盤歌」をめぐって・補説―(『磔』四月号(通巻百五十号) 磔の会 一九九九年四月) において、順の「碁盤歌」と好忠の「毎月集」の共通性を指摘しておられる。

(8) 天野紀代子氏「和歌に詠まれた農作業―貫之内裏屏風歌を起点に―」(『法政大学文学部紀要』第四十四号 法政大学文学部 一九九九年三月)、松本真奈美氏の前掲論文にも、

貫之の屏風歌と順・好忠歌の影響関係についての指摘がある。

(9) この「さをしかの」歌は、『源順集』にも入っているが、「あるところの前裁あはせの歌の判」として、この『女四宮歌合』の兵部君の歌を順の判歌とともに収めたものである。そのため『源順集』は数には入れなかった。

(10) 『教長集』二六四番歌に「田子」が、『林葉和歌集』三九六番歌に「ぬし」が詠まれているが、ここでは「人」という語に限定した。

* 散文における「すだく」

「すだく」という語は物語にはほとんど登場しないが、平安時代のものでは二例確認できる。

・ 色々の花の木、繁く生ひたり。小鳥は目に近くすだけり。

(『うつほ物語』あて宮)

・ わが御殿の、明け暮れ人繁くても、騒がしく、幼き君たちなどすだきあわてたまふにならひたまひて、いと静かにものはれなり。

(『源氏物語』横笛)

(本文は『新編日本古典文学全集』により、傍線は引用者による)

『うつほ物語』は『万葉集』以来の用法と言えるが、好忠の

「雀」の影響もあるのか「小鳥」に使用している。『源氏物語』は、夕霧が自分の家は小さい子供たちがたくさんいて、いつも騒いだり動き回ったりしている様子と比べて、ここ(落葉の宮の居所)はとても静かだと感じている場面である。「人」に対して用いてはいるが、ここでは鳥のように、こちらの意思では制御できないものが集まって騒ぐイメージで用いていると思われる。

これ以降は、『住吉物語』や『平家物語』などにも若干見られるが、鳥か虫の例のみである。

(はしもと みか／常翔啓光学園中学校・高等学校非常勤講師)

【表1】農作業の歌

作 品 名	計	農作業のみ	+ 季節の推移	+ 恋 (相聞)	+ 述懐	+ 風流
万葉集	35	7 (*5)	7	19		2
素性集	1			1 (1)		
古今集	7	1	3 (2)	2	1	
躬恒集	3	2 (2)			1 (1)	
忠岑集	1		1 (1)			
是則集	1		1 (1)			
貫之集	9	1 (1)	2 (2)	4 (3)		2 (2)
公忠集	1					1 (1)
後撰集	6	1		5		
清正集	1			1 (1)		
頼基集	1		1 (1)			
忠見集	2	1 (1)			1 (1)	
宰相中将君達春秋歌合	5		5 (5)			
元真集	2	2 (2)				
信明集	1			1 (1)		
海人手古良集	1	1				
安法法師集	1	1 (1)				
古今和歌六帖	10	1	3	6		
源順集	9	4 (1)		3 (1)	1	1
中務集	2	2 (2)				
元輔集	2		1 (1)		1 (1)	
兼盛集	5	3 (3)	1 (1)		1 (1)	
千穎集	2	1		1		
能宣集	3		1 (1)		2 (2)	
恵慶法師集	4	3 (1)	1 (1)			
賀茂保憲女集	3		3			
朝光集	1	1				
相如集	1			1		
拾遺抄	1					1 (1)
好忠集	16	3	5	3	2	3
重之集	3	2	1			
拾遺集	1	1 (長歌)				
嘉言集	1	1				
四季恋三首歌合	1		1 (1)			
大式高遠集	2	2 (2)				
道濟集	3		2 (1)	1 (1)		
道明阿闍梨集	2	1				1 (1)
東宮学士義忠歌合	2	1 (1)	1 (1)			
和泉式部集	3	1 (1)	1 (1)		1 (1)	
大斎院前の御集	15	15				
公任集	2				2 (1)	
内裏根合	1	1 (1)				
家経集	1	1 (1)				
相模集	2	2				

【表2】「すだく」の用法

作 品 名	計	鳥	虫	蛙	人	その他
万葉集	5	鳥 2 葦鴨 2 水鳥 1				
女四宮歌合	1					さを鹿 1
古今和歌六帖	1	鳩鳥 1				
兼盛集	1				人 1	
平中物語	1				人 1	
能宣集	1			蛙 1		
恵慶法師集	1				人 1	
賀茂保憲女集	1		蛩 1			
大和物語	2				人 2	
好忠集	4	雀 1	虫 2	蛙 1		
重之集	1			蛙 1		
和泉式部集	1					さを鹿 1
大斎院前の御集	1			蛙 1		
弘徽殿女御歌合長久二年	1			蛙 1		
六条斎院歌合（天喜四年）	1			蛙 1		
六条斎院歌合（天喜五年）	2		蛩 2			
伊勢大輔集	1		虫 1			
相模集	1			蛙 1		
若狭守通宗朝臣女子達歌合	2	鴛鴦 2				
（後拾遺和歌集）	2			（蛙1）	（人1）	
左兵衛佐師時家歌合	1		蛩 1			
祿子内親王家歌合五月五日	1		蛩 1			
経信集	1			蛙 1		
散位源広綱朝臣歌合	1			蛙 1		
堀河百首	9	鳩鳥 1 水鳥 1 あじむら 1	虫 1 くつわ虫 1 蛩 3			をしか 1
永久百首	6	鴛鴦 1 鳩鳥 1	夏虫 1	蛙 3		
右兵衛督家歌合	1		蛩 1			
俊忠集	1		夏虫 1			
西国受領歌合	2					春駒 2
散木奇歌集	1		くつわ虫 1			
新撰朗詠集	1		虫 1			
為忠家初度百首	6	水鳥 1 鴛鴦 1 鈴鴨 1	虫 1 松虫 1 蛩 1			
行宗集	1		蛩 1			
久安百首	3	むら鳥 1	鈴虫 1 蛩 1			
忠盛集	1				人 1	
和歌一字抄	3		鈴虫 1 蛩 2			
和歌童蒙抄	1	浜千鳥 1				
出観集（覚性法親王）	2		蛩 2			

【表2】「すだく」の用法（続き）

作 品 名	計	鳥	虫	蛙	人	その他
建春門院北面歌合	1	鴨鳥 1				
広田社歌合承安二年	1	鳥 1				
三井寺新羅社歌合	3	子規 1			人 2	
教長集	3		蛭 2		田子 1	
風情集（公重）	3	雀 1	蛭 2			
治承三十六人歌合	1	鴛鴨 1				
頼政集	1					さい 1
重家集	1		蛭 1			
有房集	1		蛭 1			
二条院讃岐集	1		虫 1			
長明集	1		蛭 1			
皇太后宮大進集	1		蛭 1			
月詣和歌集	1		虫 1			
高倉院昇霞記	1		蛭 1			
寂蓮無題百首	1		夏虫 1			
千載和歌集	1	革鴨 1				
宮河歌合	1		きりぎりす 1			
残集	1				人 1	
俊成五社百首	2		夏虫 2			
林葉和歌集（俊恵）	2		蛭 1		ぬし 1	
林下集（実定）	2	うぐいす 1	蛭 1			
殷富門院大輔集	2	あじむら 1		蛙 1		
実家集	2		きりぎりす 1 蛭 1			
宝物集	1				人 1	
六百番歌合	5		蛭 1	蛙 4		
御室五十首	1		蛭 1			
正治初度百首	4	むらすずめ 1	蛭 2	蛙 1		
通親亭影供歌合	1			蛙 1		
朗詠百首（隆房）	1		蛭 1			
内裏詩歌合建保元年二月	1		松虫 1			
内裏歌合建保元年閏九月	1		虫 1			
明日香井和歌集（雅経）	1			蛙 1		
為家千首	1					魚 1
拾玉集（慈円）	7	水鳥 1 むら鳥 1	虫 1 蛭 2	蛙 2		
露色随詠集（鐙也）	1					いろ 1
土御門院御集	1	鴛鴦 1				
範宗集	1		蛭 1			
拾遺愚草	2		蛭 1	蛙 1		
拾遺愚草員外	1				人 1	